

オリヴィアとヴァニラの過ごす時間

くりおね/八千草

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二重人格にしてひとりふたりのヴィオラの音精、オリヴィアとヴァニラと、ときどき指揮者の過ごす日常の風景を4コマ漫画のような気軽さで読めるよう

少しずつ短編集として執筆していきたいと思っています

更新は、ネタを思いつき次第です

目次

ヴァニラとジンジャークッキー	1
屋根の上のヴェイオラ弾き	5

ヴァニラとジンジャークッキー

ある日の平和な午後のこと、指揮者はオリヴィアとヴァニラの暮らす部屋の前にいた。

ちようどヴィオラの練習中らしく、外にも微かに豊かな響きを持った音色が届いていた。

こほん、と一つ咳払いをして強めにヒモを引き呼び鈴を鳴らすと演奏が止まり、

代わりにとたとたとこちらに駆けてくる足音が聞こえてきた

「お、コンダクターじゃん。よく来たね　いまオリヴィアと替わるからさ」

出迎えてくれたのはヴァニラ　ヴィオラの音精オリヴィアの持つ裏の人格にして勝ち気な性格の女の子だ。

いや、そのままがいいのだ、とヴァニラに告げる。

「ん？なんだよ。オリヴィアに会いに来てくれたんじゃないのか？」
それもちろんだが、ヴァニラにも自分は会いに来た。そのために前もってヴァニラが表に出ていることの多い時間というものも、オリヴィアに尋ねて知っていたのだ。

オリヴィアと良い仲を築いてからはこうして彼女の部屋を訪ねることも数回あったが、

その度にヴァニラはオリヴィアを優先して、二人の時間を過ごすようにしてくれる。

オリヴィアとヴァニラは意識を共有することができるので完全に引っ込んでしまうことこそあまりないものの、

彼女はオリヴィアを大切に思って常に慮っているため、自分は影に徹しようとする事が多いのだ。

「ふくん、アタシにも会いに、ね」

ヴァニラは腰に手を当てながら上半身ごと動かし、こちらの頭から爪先までを覗き込むようにして一周観察し

「ま、いいさ。　歓迎するよコンダクター」

ニカッ、と歯を見せるようにして笑顔を作った。

そうだ、特に今日はヴァニラに食べてもらおうと手土産を持ってきたのだ」と告げると

「何か持って来たと思ったらへえ、気が利いてんじゃん。とりあえず、茶でも出すからさ」座っててくれ」

そういつてティータイム用のテーブルと椅子を勧めてくれた「で？一体何を買ってきてくれたんだい？」

二脚のティーカップに紅茶を運んできてくれたヴァニラ。

ヴァニラはお菓子が好きだと聞いたので、評判の焼き菓子屋でクッキーを買ってきたのだ、と告げると

「お、オリヴィアから聞いたのか？いいじゃんいいじゃん」

手渡したクッキーの包のリボンを解いて 真っ白な皿にきれいに斜めに並べながらヴァニラは興味津々の様子で

クッキーの一つをつまんで裏表返しながら眺めている。

「それじゃ、いいよな？ 早速、いただきま〜す」

遠慮せずどうぞ、とすすめると上機嫌のままヴァニラはかぶり、と持っていた一枚にかじりついた

……かかったな。

「!？」

ヴァニラの表情が一転、驚愕に染まる。

そのまましばらく固まって、どうするのかと観察しているとやがて震えながらクッキーをゆっくりと皿に置き

「か」

か？

「か、辛れえ〜!!」

口を両手で抑え、眉をひそめ目を細めながら 涙目になっているヴァニラ

申し訳ないが、なかなか可愛いな などと思っていると

「ほ、ほんらくらー、ほんらくらよこれえ!？」

こちらを涙目のままにキッと睨みつける。

「あ、あらし、ほんろ もうらめ……うああ」

「こ、こんらくらー、れつたい ゆるさらい……から、なあ」

そう言いながら、急にヴァニラの首がカクン、とうつぶわいた。

そして次に顔を上げたヴァニラはどこか悪戯ぼく笑いながら、口の中のクツキーを咀嚼しこくん、とのみこむと

「ふふふ……もう、ヴァニラったら、こんなにも美味しいのに」

こちらに向かってやわらかく微笑みかけた

「すみません……指揮者さん。つまらない、イタズラに付き合わせてしまつて」

オリヴィアに完全に交代した彼女は、こちらを気遣うように軽く頭を下げる。

いや、いいのだ。オリヴィアの作戦に完全に乗つかったのは自分なのだから

「それにしても、おいしい、クツキーですね……辛くて、刺激的で、焼きたてのいい香りがします。」

そう、ヴァニラに食べさせたのはピリリと辛い、ジンジャークツキーだったのだ。

ヴァニラは確かにお菓子は好きだが、それはほとんど甘いもので、辛いものは苦手。そういうものはいつもオリヴィアの担当になるのだった。

「もう……ヴァニラったら、そんなに指揮者さんを責めてばかり。ヴァニラがいけないのよ？あなたたつたらせつかく指揮者さんがお茶会に誘ってくれても、すぐに引つ込んでしまふんだから」

オリヴィアの心のなかでは、まだヴァニラがこちらへの恨み言を吐き続けているようだ。

そう、今回のことはオリヴィアと示し合わせて一計を案じたのだ。自然な形で、オリヴィアとヴァニラと自分、三人でのお茶会を楽しみたいと。

オリヴィアの中のヴァニラに語りかける。　妙な悪戯をして済まなかった。ちゃんとヴァニラの好きそうな

甘い味のクツキーも用意してあるから、出てきて一緒にお茶会を楽しまないか、と。

「ほら、いつまでも……いじけていないで？　こっちのクツキーは甘

「いあまりいい、バナナフルーツクッキーなんだって?……ね」

ヴァニラを説得するオリヴィアの様子を見て、これは時間がかかりそうか?と思っていたのだが

やがて彼女は恨めしげにこっちを刺すような視線を送りながら

「今度のはホントに大丈夫なんだろうな?」

そう、言った

ああ、もちろん と答えながらも一つのクッキーの包みを解いて更に並べる。

自分たちは二人で一人、とヴァニラは言う。

だけどそれは違うんじゃないかとも思う。目の前の躰に宿る二人の少女。それぞれが好き味の二種類のクッキー。

窓からの少し傾いた光が差すテーブルで、これから”三人でのお茶会”が始まるのだ。

期待に胸を膨らませながら、指揮者はヴァニラが駄目だと言ったクッキーを一つつまみ上げ囁くと、

これは、結構辛いな。と言ってはははと笑ってみせた。

屋根の上のヴァイオラ弾き

夜の闇の名残がまだ残る明け方の空のかすかな明るさと肌寒さの中、かすかに聞こえてくる軽快なヴァイオラの演奏にヴァニラは目を覚ました。

『ん……う……ここは……外か?』

「あ……ごめんヴァニラ、起こしちやつたかな」

ヴァニラと同じ体を共有するオリヴィアは、演奏の手を止めて謝罪を口にする。

『いや、全然構いやしないよ。けど、珍しいなこんな朝早くから練習なんて。それに……ん?』

オリヴィアの”内側”から眠気混じりにあたりの様子を確認するヴァニラは今置かれている状況の奇妙さに気がついた。

『なんだ?……ここ……屋根の、上か?』

「そう。ちよつと、ね。上つてみたくなって。」

『ふうん……珍しいこともあるもんだな。』

まだ目の覚めきらないヴァニラはそれきり少し黙ってしばらくぼんやりと街の景色を眺めていた。

オリヴィエもそれにつられてしばらく二人で黙っていたが、やがて屋根の端に用心して腰を掛けると

「ねえ、ヴァニラは聞いたことある?」

と、問いかけた。

『ん?何をだ?』

「”屋根の上のヴァイオリン弾き”のお話。」

『え？ああ、なんとなく聞いたことがあるような気がするな何だっけ、歌劇……じゃなくて民話か何かだったかな。』

「うん、そうだね」

両手を口の前にかざしてはあ、と息をつき細くしなやかな指を温めるようにしながらオリヴィアは答える。

「主人公は貧しいユダヤの牛乳売で、迫害から逃れながら妻と3人の娘と憤ましやかに暮らしているの」

『うん』

「3人の娘はそれぞれ結婚相手を見つけるんだけど、主人公からしたらどれも簡単には認められない縁で、そのたびに悩んで自分たちの生きてきた人生とかしきたりを思い返すんだけど。」

「そんなときにどこからともなくそのヴァイオリン弾きは現れて、悲しいこと、苦しいこと、嬉しかったこと……簡単にはいかない人生のいろんなことをのせて小躍りしながら軽快なヴァイオリンを奏でるんだって。」

『面白いやつもいるもんなんだな。あ、いやそういうお話か。』

「私達はみな屋根の上のヴァイオリン弾きのようなものだ”って主人公は言うんだ。そのお話をちよつと思いついて……」

『それでちよつと屋根の上で弾いてみたくなった、ってことか』

「それでね、あの……私達も……いま、この世界に暮らす大勢の人達もみんな、今同じように苦しみとか……色んな思いを抱えて生きているけど」

『ああ、文明ギルドとの戦いも奴らに奪われる人の悲しみも まだまだ終わらないしな。』

「私も……私達も、そんな人達の思いを乗せて、寄り添う演奏ができるかな……って」

『……できるさ、できるに決まってるだろ？オリヴィアならさ』

「私なら、じゃないよ。」

そう言うオリヴィアは少し眉をひそめて不満げにしながら続ける。

「私達2人で、だよ……。」

『……』

「ねえ、ヴァニラ。そう……約束してくれる？これからも一緒にいられるって。2人で一緒に、大切なものを守っていこうって。」

『……ああ、そうだな。』

(もし、あたしがいなくなつたとしても オリヴィアならきつと、やっていけるよ それが……一番いいんだ。)

返事とは裏腹に、心のうちに暗く重い気持ちを抱えながらも決して悟られないようにヴァニラは軽快に答える。

『まっ、あたしらはヴァイオリンじゃなくてヴィオラ、なんだけどな

” 屋根の上のヴィオラ弾き” ってどこか！』

いつの間にか空もだいぶ明るくなり、まだ寒さは残るが夜明けが近いのを感じさせた。

『で、どうする？そろそろ家の中入る？』

「ううん、もう少しだけこうしていようかなって。」

『そうだな、あたしも少しはヴィオラ、練習したいしな。』

へへ。と笑いかけながらそう応えるヴァニラの存在を強く感じながらオリヴィアはゆっくりと立ち上がると

「また、新しい一日が始まるね。」

穏やかに、軽やかに慣らすようにしてヴィオラを奏でながら朝日が街の屋根々々を照らす頃まで、2人で今はのんびりと陽が上るのを

待った。